島袋盛敏 著

増補 琉歌大觀

沖縄タイムス社

島袋（しまぶくろ）　盛敏（せいびん）
1890年（明治23）12月19日沖縄首里に生まれる。沖縄県師範学校卒業。金武，北谷，宜野湾，浦添，伊波の各小学校訓導。文検漢文科合格。沖縄県立第二高等女学校，東京成城学園高等女学校教諭を歴任。
1970年（昭和45）1月2日逝去。
著　書—「球陽外巻遺老説伝訳」「琉球の民謡と舞踊」「沖縄語辞典」「琉歌大観」

増補 琉　歌　大　観

1964年5月10日　初版発行
1978年7月20日　第2版発行©

著者　島　袋　盛　敏
発行者　玉　城　義　弘
印刷者　宮　城　清　徳

発行所　沖縄タイムス社
沖縄県那覇市久茂地2－2－2

（印刷・サン印刷／製本・沖縄製本株式会社）

序

比嘉春潮

「大島筆記」（一七六二年）に、「うたう歌は琉球歌と云ふ。或は琉歌と云ふ。大格上十六字（八字二句）下十四字（八字一句六字一句）合せて三十字也。中歌（仲風のこと）と云ふ体は、上十二字（七字一句五字一句）下十四字（八字一句六字一句）合せて二十六字なり。目出度歌を一番にたつる、ふくらしと云ふ。此曲国王の前にても歌ふ也」とあり、なお同書附録に琉球歌の項を設けて「けふのふくらしや……」以下五十余首が語釈付で掲げられている。中に仲風五首と終りに即興の応答歌が添えられている。これはおそらく琉歌が本土の文学界に紹介された古いものの一つであろう。仲風も既に発生していた十八世紀中期におけるわが琉歌の大体がうかがえる。

田島利三郎氏が明治三十一年（一八九八）、雑誌「国光」に発表した「琉球語研究資料」の中に「琉球ばかり歌をよむ者の多きところはあらざるべし。その巧拙はおきて、男女をいはず、貴賤を問はず、凡そ物ごころ知れるものは、歌よめじとおもふもの一人もあることなし。此のうたを三味線に和して歌ふ節数、大凡二百五十、豈に又盛ならずとせんや」と書いている。田島氏は沖縄学の父と呼ばれる伊波普猷氏におもろの研究をすすめた人、沖縄文学にも造詣深く、この文章は当時の琉歌についての適確な記述といえよう。彼はまた「斯道の名人として喧伝せらるるものを、よしや思つる・恩納なべ・平敷屋朝敏とす。恩納なべのは想といひ調といひ、すべて琉球うたらしけれど、よしや・平敷屋等のは和歌の影響をうけたるところ多し。彼等の歌を読みもてゆくに、前者は万葉時代の歌の如く、後者は古今以後の歌人のよめるが如し。その他だいんす按司と異名せられし本部按司朝救を始めとして、与那原親方良矩・東風平親方（朝衡）・田里親雲上（朝直）等、歌人と称せらるる人多しといへども、是等も亦た皆和歌和文を能くせし人なりき」とも書いている。琉歌については、今日でもこれ以上言うべきことはないように思える。

琉歌がいつごろから詠まれるようになったか、それは一つには沖縄人が日本文学に接し和歌を知ったこと、今一つは三味線が伝来したことと関係があると私は考える。

仏僧禅鑑の渡来は十三世紀中期、英祖の時代であった。禅鑑以後の渡来僧と沖縄出身の修業僧は、すべて日本文化の将来者であったといえる。彼らによって和訓儒学も和文・和歌も伝わって来た。一方三味線は十四世紀末期のころ久米村人の移住とともに伝わったと考えられている。従来おもろを歌うに、手拍子を取り鼓をたたいただけだった沖縄人は、この舶来の新楽器の妙音にすっかり引きつけられたことであったろう。ただ、おもろのよう

な自由型の長歌の伴奏にはこの新楽器はぴたりとは来なかったと見える。

三味線の伴奏でうとうに、おもろのような長歌よりも、定型でしかも短くてまとまった思想を表現し得る和歌のような歌の方がよかった。八八八六三十字の琉歌発生の基盤はここに用意されていたといえる。一方、三味線の方でも、高価の蛇皮に代わる渋張が発明されてその普及は意外に早く、そして琉歌の発展も、またこれに伴った。伊平屋島の百姓から身をおこし、後に第二尚氏の始祖となった金丸は「命果報願や石の身の如に首里が御位階願は家来座敷」と詠じている。十五世紀中期には、こんな立派な琉歌が詠まれるまでになっている。

さて沖縄の歌謡はおもろをはじめ、大体それぞれの地域の方言で歌われているが、琉歌と組踊は沖縄の標準語であった首里語を基盤に発展して来たと見ることができよう。それで琉歌を読み琉歌を歌うには首里語の発音によるのが正しい伝統である。しかるに近来は音楽家の間にさえ、これを等閑に附する傾向があり、鑑賞の上からも伝統保存の上からもまことに遺憾なことである。本書においても最初その正しい発音を表記してあったそうだが、都合あって削ってしまったらしい。惜しいことをしたものである。しかし幸いなことに、島袋君の十数年の苦心の結晶たる沖縄語辞典が、昨春国立国語研究所から出版されている。これは実は首里語の辞典で、琉歌や組踊のあらゆる語の正しい発音が書かれているから、心ある人は就いて見られることをおすすめする。

最後に私は著者島袋君について一言申し述べたい。島袋君が琉歌研究の権威者だということは本書を一見すればわかることで改めて云うまでもないが、実は彼自身隠れたる琉歌の名人であるという事実である。彼れはかって東都で琉歌会をつくろうと幾たびか企てたことがある。が彼と並び得るような歌人らしい歌人が見出せないでその企ては実現しなかった。私は本書にも彼の家集を附録とするようすすめたがどうなったか。それはとにかく、こんな話がある。先年火野葦平氏が沖縄に取材した小説「赤道祭」を書いた時、作中の思鶴なる美人がすばらしい恋の歌を詠んで読者を驚かしたことがあった。沖縄人の中にはてっきり葦平氏が古歌を利用したのだと推して無駄な探索をした人もいた。しかし、これらの名歌は実はすべて島袋君の代作で、立ちどころにつくったものであった。島袋君はちょっとしたいたづらにもあれだけの歌をひねり出す腕前がある。まさに驚嘆に値いする。先日島袋君に逢った時、思鶴の歌を琉歌大観に採録したかと聞いたら、彼は笑って頭を振った。それは惜しいことである。幸いに私の手許にその時の原稿が残っているから、勝手にここに載せることにする。(詞書きは葦平氏の参考のために附けたもの)

○思いがけずも君に心奪われて
思きやけもすらぬ里前ちゆ目拝で、恋しさや日日にまさるばかり。

○恋は全身の血をわかす、罪と知りてのがれようと思うに、
道ならぬ恋路のがればしやあすが、我肝惚々となるが心気。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

○海の底に見た君、わが心をとらえる。

海の底までもてらきやがて見ゆる、玉黄金里の忘れぐれしや

○人に示さぬわが肌、恋しき君に見られてうれしさ恥かしさをいかにすべき

百かくしかくす女身のまはだ、かなし思里が見ちやらと思ば。

○人に示さぬ肌、やがて君の肌と添うと思えば、ふるえる

命よりまさて惜しさある肌も、里がおみはだと添ゆらとめば。

○海はわが命、わが世界、同じく海を愛する君と逢って心ときめく

黒潮青潮湧きゆる海の中をとて、里をがむことや夢がやゆら

○恩誼の絆につながれて、君をあきらめようと逃げたが、かなしい。

義理ともて恋路忘らてやりしゆすが、里が面影のまさて行きゆさ。

○月花草すべてのものみな君の顔に見ゆ

月見れば月に花見れば花に、恋し思里の影のうつて。

○海底の運命が自分を一変せしめた

深海の底に里前拝がだすや、深々と結ぶ縁がやたら。

○罪も恐れず命も惜しまず、君と二人にてあらん

罪も我ね思ぬ命もまた思ぬ、きやならはもままよ里と二人。

○恋のみが女の命

人の思ことやあまたあらやすが、恋ど女身の命さらめ。

○青春の生き甲斐

天と地の中に生れたるしるし、里拝でくらす運命(さだめ)たばうれ。

以上

序にかえて私の歩んだ道を語る

＝赤裸々のざんげ録＝

一

私は明治二十三年（一八九〇）十二月、沖縄の首里に生まれた。家が頑固党であったため、小学校三年まで髪を結っていた。いわゆる欹髻（カタカシラ）というもので、本土のちょんまげに相当するものである。

それで髪を結う時は、いつも逃げ回って大騒ぎを演じたが、つかまえられるとサバチ（大きな櫛）でコツンと額を打たれながら、

「あがりあかがれば墨習ひが行きゆんかしら結てたばうれ我親がなし」

という歌があるのは知らないか、あんまりマク（腕白）になると、ゆるしてはおかんぞと説教された。その時は大変恨めしい痛い歌だと思ったが、いまは一種のなつかしさをおぼえる。

当時のわがカタカシラ姿を、写真にとっておけばよかった。どんなにこっけいで、しかも面白く、かつ珍しいものだったかと思う。しかしその頃は、写真をとると、魂を抜きとられるという迷信があったから、一人息子の私の写真を、母はとうていとらせてはくれなかったのかも知れない。

明治四十一年四月、師範学校に入学し、同四十五年三月卒業したが、その間お世話になった先生で、いまもお元気なのは源河朝達先生ただお一人になった。先生がある時、同窓会の席上で、

「先生がやゆら教へ子がやゆら互にはげつぶるなたるをかしや」

とお詠みになって、一座大笑いになったということが、沖縄の新聞に出ていたが、まことにその通りで、八十の坂を越えられた先生と、七十の坂を越えた生徒達が、みな見事なはげつぶるになって、わいわい騒いでいる光景は、正に天下の奇観であったろうと想像される。

同期生は、一年に入学した時は五十人であったが、卒業の時はその半数の二十五人に減っていた。師範という学校が、いかに無情冷酷で、きびしいところであったかということがわかる。

その無事に卒業した二十五人も、いつの間にか大方は死んでしまって、いまはまたその半数の十二三人ぐらいになっているだろうと思う。死んだ者は、皆惜しく思うが、殊に惜しく思われる人間が二人いる。

その一人は、宮古出身の砂川寛栄で、いま一人は首里出身の前原信明だ。砂川寛栄は非常な出来物で、ワシントン大学を卒業して、マスター・オブ・アーツの学位を得て帰ったが、間もなく風の如くこの世を去ってしまった。この男が生きていたら、何か一仕事するであろうと思っていたが、実に惜しいことをした。

前原信明は人格の美しい人間で、私はこの男ほど福徳円満な珍しい人間はあるまいと思っていた。

人は誰でも性の合う者がいるかと思えば、合わない者もいるし、好感をもって迎えられる者があるかと思えば、また虫の好かない者もいる。ところが前原信明は、誰とも親しく交り、いかなる人間にも好意をもって接し、誰も憎まず、誰にも憎まれず、誰も恨みず、誰にも恨まれず、知る限りの人皆を愛し、そして皆に愛されていた。およそこの世の中に、こんな人間が果して他にもいるであろうかと思われるほどであった。

二

死んだ者をあまりほめ過ぎると、生き残った連中が不平をいうかも知れないが、生き残った連中にもいろいろ面白い人間がおる。

師範に入学後間もない頃、ある日クラスの親睦会を、虎頭の山の上で開いたことがあった。いろいろの希望や抱負を述べ合った後、余興に移って、歌をうたったり、隠し芸を披露したりしたが、いまでもおかしく思い出されるのは、八重山出身の伊舎堂孫諒が柄にもなく俳人を気取って、

「伊舎堂が虎頭の山にとまりけり」

という迷句を吐いたことであった。この男はクラス中の最小の小男であったから、まるで蟬が虎頭の松にとまってでもいるように思わせて、皆を笑わせた。

しかしそれよりなおおかしかったのは、石川出身の石川善光が、

「三味線小弾けば歌しゆすやためしあばぐわ手よ取れば抱きゆすためし」

と歌ったことで、これには一同笑いころげて大騒ぎになった。その時級主任の

高橋清次郎先生もおられたが、先生には歌の意味が少しもわからない。しかし皆がひっくり返って笑っているので、多分おかしいことであろうと、皆と一緒になって笑っておられた。それがおかしいので、皆は更に大いに笑いころげた。

「チャタレー夫人の恋人」のようなきわどい小説が出るいまの世の中では、この歌などそれほど驚くにも当らないが、しかし当時はもしもこの毛遊びの歌の意味が、少しでも先生にわかると、石川は停学になるか、放校になるかわからないほどの冒険であったので、石川は実に大胆な男だと、皆は笑いころげながらも、一方では驚いたりあきれたり感心したりしていた。

それから後、皆がどんな余興をやったか、よくおぼえていないが、それはこの二人の芸当が、あまりにも異彩を放って他の者はすっかり食われてしまった形であった。

師範時代は、頭にかぶるもの、体に着るもの、足にはくもの、何から何まで一切合切すべて官費で、何の不足もなかったが、ただ三度三度の食事の麦飯だけは、文字通り閉口した。馴れない間は、半分残して席を立つこともしばしばあったが、そんな時真栄城守行が、

「ヌーガヌーヤガ、ムノーマーサミ」

と、泊阿嘉の歌をうたって、笑っていることがあった。非常に楽天的な愉快な男で、四角張った師範学校に、こんな面白い男がいたかと思って、それからというもの殺風景な寄宿舎生活も、私は楽しいと思うようになった。

いま一つ師範時代に楽しいと思ったことは、山内盛彬という楽友がいて、琉球音楽に趣味を持つようになったことである。山内は琴、三味線、バイオリン、ピアノ、その他あらゆる楽器をこなせる天才的音楽家で、時々その家に行って、琉球音楽の大家である祖父盛熹翁のお話を聞くことができたのは、いまも忘れることができない。私が行くと、孫の友達が来たといって、翁は至極上機嫌になられて、昔節の解釈をして聞かして下さったり、湛水流の歌い方はこういう風だと、うたわれたり、なかなか丁寧なもてなし方をされた。

山内について、いま一つ思い出されるのは、二年生の時に結婚したことである。学生時代に結婚するとは、よくよくの事情があったのだろうと思ったが、しかし少しうらやましいと思う心もあった。

ところが一年生時代に既に結婚して、三年の修学旅行の帰りには、子供のおみやげをひそかに買っている豪傑もいたから、われわれ同級生は開いた口が塞がらないほど、びっくりした。その豪傑は伊礼門恒慎という男であるが、これは口の堅い男で、修学旅行がなかったら、われわれは、卒業するまで彼が親父になっていることを知らなかったであろうと思われた。

同期生にはいろいろ変った人物がいた。中央大学教授の高里良恭は、沖縄の師範を出ると、東京高等師範に進んだが、彼は師範という名にあきあきしたのか、当時最も難関として恐れられていた一高に方向転換して、それから東大に進み、西洋史を専攻する学者となった。熱烈なクリスチャンとなって、マルチン・ルッターの研究では、恐らく彼の右に出る者はあるまいといわれるほどであるから、相当なものだと思う。

広島高師から京大に進み、やはり西洋史を専攻した上里朝秀は、成城学園の功労者で、総長にもなるべき人物であるが、戦後の学制改革や、学園内にいろいろの騒ぎがあったため時機を逸して、とうとう縁の下の力持ちとなって、成城高等学校長で通してしまった。

真栄城守行は、砂川寛栄と並ぶ切れ者で、教育界を飛び出して、新聞記者、村長、県会議員などして、口八丁手八丁、各方面に縦横無尽に暴れ回っていたが、いまは大阪の豊中市に隠居して、サボテンと楽しんでいるようである。

与世里盛春は、私と同じく翁姓の一門だが、この男には皆が聖人といっていた。決して女の話をしないのである。皆が美人を見てわいわい騒いでいる時も、彼は見向きもしないで、どこ吹く風とすましこんでいた。孟子を全部暗記して、その記憶力のすばらしさに、皆をびっくりさせたが、卒業後は植物学者となって、中学校長や農学校長などを勤め、近頃は考古学の研究にも指を染めているようである。

奥村幸福は、皆がハッピーといっていた。温厚な君子で誰にも愛し親しまれていた。二中の教員をしたり、那覇市の視学をしたり、戦後は教育委員になったりしているが、典型的な教育家ということができる。

その他、当真嗣文、真栄城守光、安谷屋盛誠、伊志嶺朝続、伊志嶺朝信など皆校長を勤めあげて、それぞれ立派な功績を残しているが、いまは何をしているか、ようすがよくわからない。久米島の産仲原善忠はおもろの新釈で、伊江島の産中原幸吉は琉歌物語で名を知られている。

三

さて話を元に戻して、私は師範学校を卒業すると、金武小学校の訓導に任命された。新卒業のほやほやであるから、兵隊の位でいえば二等兵ぐらいのものであろうと思いながら行った。

ところが行って見ると、意外にも中尉ぐらいの士官待遇を受けた。それは当時正教員が少くて、講習科を出た準訓導や、名護の農学校を出た代用教員などがいて、いきなりその上に据えられたからであった。

校長を始めそれらの老先生達から、手を取らんばかりに大歓迎されて、私の人生へのスタートは、上々というべきものであった。村の人達も、首里から若い先生が来たといって、何かと親切にもてなしてくれた。

窮屈な師範学校の寄宿舎から、自由の天地に飛び出した時の気持ち、はじめて月給をもらった時の気持ち、はじめて結婚した時の気持ち、思えば誠に花花しいものであった。

可愛らしい腕白小僧や、茶目子たちを相手にした時は、

「思童すかちなまど思知ゆる昔わぬもたる人のなさけ」

という琉歌の味が、しみじみとわかるような気がした。代用教員の中には、オルガンの弾けない先生もいたので、時々代って他のクラスも教えたが、そんな時はあちらからもこちらからも引張りだこにされて、私の人気も相当なものだと思うことがあった。殊に女生徒からは大いにもてはやされたが、それはちょうどいま流行歌手が、方々のファンにもてはやされているようなもので、思い出しても懐しく、わが人生の花ともいうべき時代であった。

たかが田舎の小学校で、少しばかりオルガンが弾けるといって、人生の花とはすさまじいと笑う人があるかも知れないが、いかなる境遇にいても、人生の花というものはあるものだと、しみじみ感じたのである。

その時は尋常科六年の上に高等科二年まであったが、生徒が多いので、男女別々の学級になっていた。私は高等科の女生徒を受け持っていたが、時々海岸に遠足して、一日楽しく暮らしたことがあった。

「金武のめやらべと金武の浜おりて語らたる昔忘れぐれしや」

もしも一人のめやらべと語ったということであったら、汀間と安部境の浜の恋物語みたようになるが、金武の浜では四十人ぐらいの丸目かな達に、昔話を聞かせてやったような次第であったから、後の世の語り草になるまでには立ち至らなかった。しかし金武は私が始めて世に出たところで、終世忘れることのできない懐しい土地である。

あしかけ六年ここにいたが、母がしきりに早く転任して首里に来いと催促したので、山下孫十郎校長に、首里にやってくれとたのむと、山下校長は

「君のような優良教員に去られると、あとが困る。いい後任が得られるまで、もうしばらく我慢してくれ」

という。そういわれて見ると、人生意気に感ず、功名富貴あに論ずるに足らんやと、無理に振り切って行くことをしないで、しばらくとどまっていた。その中に首里の学校は空席がふさがり、その代り宜野湾の学校に欠員があるということが伝わって、一中にいた叔父が運動してくれたので、今度は山下校長も仕方なくゆるしてくれた。

しかし首里に近くなったと思う間もなく翌年は北玉に転じ、その翌年は伊波に流され、その翌年は、また浦添にかわるという風に転々したが、浦添に来た途端に、那覇の県立図書館に来ないかという話がかかった。

四

当時の図書館長は、伊波普猷先生で、司書は照屋寛範氏であったが、照屋氏が牧師となって教会に行かれることになったので、その後任として私が招かれたわけである。推薦して下さったのは、当時県庁におられた比嘉春潮さんであった。大正九年三月のことである。

そこで田舎まわりばかりしていた私は、今度は首里のわが家から那覇へ、毎日電車に乗って通うようになった。昨日まで詰襟服に下駄ばきで、石ころ道を難行苦行していたものが、今日は新調の背広に、靴も毎日ぴかぴか光らせて、悠々と電車に腰かけて、雨にもぬれず、風にも吹かれず、本を読んだり、四方の景色をながめたりしながら、楽々とご通勤ということであったから、まるで殿様になったような気分であった。

図書館で毎日謦咳に接する伊波普猷先生は、私がかねてから崇拝している人物であり、比嘉春潮さんは兄貴のように親しくしている先輩であり、そのほか読書

人の新しい知人友人は日毎にふえ、書物は何でも読みたいものが、目の前に一杯並ぶようになったから、私の生活はいままでとは天地雲泥の差のある楽しいものになった。

その頃図書館には、社会問題や思想問題を研究している人達がよく来た。屋部憲、照屋輝一、泉正重、宮城無無、宮城不泣、城田徳隆などという人々はその常連であったが、世間ではこの人達を社会主義者と見ていたようである。

ある日私が首里市役所に行って、市長高嶺朝教氏にお会いして、いろいろお話をしていると、市長が、

「島袋君、図書館は社会主義者の巣窟だという評判だが、どうですかアハハ……」

と、大笑された。高嶺市長の笑声の大きいのは有名で、この時も市役所中はいうに及ばず、隣の円覚寺やハンタン山の林の中までも響きわたるような大きな声で笑われたのである。

「市長さん、それはデマでございますよ。違いますよ。そんなことはありません。熱心な読書家が来るだけでございます」

と、私は汗を流しながら弁じた。

「そうですか、しかし君などもブラックリストにのせられているかも知れない、アハハ……注意した方がいいですよアハハ……」

と、いかにも愉快そうに笑っておられた。

「ありがとうございます。にらまれてはいけませんから、注意します」

といって、ほうほうの体で市長室を辞したが、隣の部屋の助役室を素通りするわけにはいかない。そこにもちょっと顔を出した。助役は比嘉盛章氏で、文検を幾つも通った秀才という評判の人であった。しかしどういうわけか、市長と仲がよくないというわさがあった。果せるかな私の顔を見ると、喜色満面にうかべて「やあ、やあ、どうぞ、どうぞ」といって椅子をすすめ、初めにいった言葉が、

「社会主義結構ですよ、大いにやりなさいよ。私は大賛成です」

というのであった。いまさき高嶺市長から、警告を受けたばかりであるのに、比嘉助役はあべこべに扇動するようなことを盛にまくしたてるのである。

「三十にして革命家になり得ない者は、人間の屑ですよ。そんなのは駄目ですよ。若い中に一度は革命家になるべきですよイヒヒ……」

高嶺市長の腹の底からの笑声に比べると、比嘉助役の笑声は口先だけで笑っているようで、その重量感は格段の差があるが、しかしその反骨振りはなかなかのものだと思った。これでは市長も定めて手を焼かれるであろうと思いながら、私は市役所の門を出たのである。

いろいろの事があったが、しかし兎に角図書館時代は、私にとって非常に愉快な時代であった。何の欲も得もなく、このまま永久に図書館でくらしたいものと思っていた。ところが、思いがけないことで、私の生活に少し変化を生ずるようなことが起った。

五

当時の私の月給は五十円であったが、伊波先生はこれだけではあまりに少いと心配されて、ある日第二女学校に行かれて、講師の口はないかと相談された。

すると国語の先生が手不足で困っているところだという話で、私は早速二高女の国語の講師を兼ねることになった。そうして一週二回行くことになった。大正十年十月のことである。

その時面白い話がある。いままで自分で買っていた新聞雑誌や読みたい本も、全部図書館で読み、余計な費用がかからなくなったから、私は月給五十円でもよいと思っているところへ、急に女学校から毎月三十円の手当をもらうようになったので、私はその使い道に困った。そこで家内に月給袋を渡しながら、

「隣り近所の貧しい人達に、少し恵んでやったらいいだろう」

と言った。すると家内は、

「あなた何をおっしゃるんですか。いままでは始終足りないで困っていましたよ。八十円あれば、どうにかこうにかやって行けるというもので、人に恵んでやるなんて、とんでもない……」

という。いとしきわが妻は、いままで不足勝ちの苦しい生活をしておりながら、一言の不平も不満もいわなかったものと見える。女というものがいかに辛抱強いものであるかと感心すると同時に、亭主関白少し注意せんといかんと思った。

さて二高女に行くようになると、月給が増したばかりでなく、花の乙女達を相手にして、わが意気大いにあがった。その花の乙女達の中には、いまの琉球政府の行政主席太田政作氏の夫人や、立法院の紅一点宮里初子議員、あるいは琉球新報

社長池宮城秀意氏の夫人、さては人民党委員長瀬長亀次郎氏の夫人などがいた。

先生は大方なくなったが、教頭であった嶺井強衛さんは、いま佐敷で田園詩人となって、歌集を出したりして閑日月を楽しんでおられるようである。女の先生では竹野光子さんが生き残って、婦連会長などになって、活躍しておられるようである。

この竹野さんは男まさりの女丈夫で、当間重剛那覇市長が市営で競輪をやろうとしたとき、猛反対の運動を起して、とうとうそれをやめさせたような実にすばらしい女性であった。

しかしその妹の島袋静子先生は、女の先生の中で一番美しいやさしい人であった。姉の光子先生が男を何とも思わぬ勝ち気な典型的な那覇婦人であるとすれば、妹の静子先生はおとなしい首里婦人のような奥ゆかしい人であった。姉妹でありながら、どうしてこうも人柄が違うものかと、不思議に思われた。

この静子先生について、面白い思い出話がある。まだ結婚しないで安元静子といっていた時、ある日職員全体が糸満に遠足したことがある。糸満には当時コーグー屋という有名な料亭があったが、そこで昼飯にしようと、一同その二階にあがりこんだ。

料亭だから、昼飯の前に一杯やろうではないかと、男の先生は早速酒を注文した。しばらく飲んでいる中に、日頃から茶目の先生がたわむれに盃を静子先生に差した。もちろん静子先生はかぶりを振って受けない。すると隣にいた先生が、自分の盃は受けるであろうかと思って出した。しかしそれも受けない。今度はどうかなと、その隣の先生が出して見た。それも物のみごとにはねつけられてしまった。そうなると誰の盃を受けるか、皆やって見ようと、男の先生達は次々に出して見たが、誰のものも受けてはくれない。とうとう最後に私の番になった。私ももちろんかぶりを振られるであろうと思いながら出して見た。

すると意外にも静子先生にっこり笑って、私の盃を受けた。さあ、男の先生はおさまらない。ようようとはやしたてる先生もおれば、怪しからんぞと怒鳴る先生もおり、不公平だなあと恨めしそうな顔をする先生もあって、なかなかの騒ぎであった。

惜しいことに、この静子先生は今度の太平洋戦争で、二高女の特別看護隊と共に花と散って、いまは高嶺村の白梅の塔にまつられているということである。終戦後その話を聞いた時、私は二三日飯がのどを通らないような気がするほどであった。悲しみはそれに止まらないで、次から次と、知人友人の悲惨な最後の知らせが来た。

しかしまた意外にもあのすさまじい鉄の暴風の中で、よくも生きながらえることができたと思われる親しい人の便りもあって、戦後しばらくの間は、悲喜交々至るというありさまであった。いま振り返って見ても、まるで一場の夢の心地がするのである。

六

思わず脱線したが、再び話を元に戻して、私が図書館と二高女をかけ持ちしている時、島袋全発校長が、かけ持ちでは困るから、学校の専任になってくれ、そうして専任になるには資格が必要だから、文検を受けて免状を取ってくれという注文を出して来た。困ったことになったと思ったが、ことわるわけにはいかない。そこで私も背水の陣をしかねばならなくなり、伊波先生とも相談の上、図書館をやめて試験勉強を始めねばならなくなった。

それまでは、図書館で読みたい本を読んだり、二高女で生徒と一緒にテニスをしたり、あるいは遠足をしたりして、遊んでばかりいて、いつも生徒を試験でいじめていた先生が、今度は自分が試験で苦しまねばならなくなった。花は咲けど鳥は歌えど、それらをかえりみる暇もなく、テニスも遠足もすべてをなげうって、ひたすら机の前にかじりつくようになった。

生来のんきで遊び好きの私は、試験というものが大のにがてで、悪戦苦闘したが、どうやらこうやら漢文の免状を取ることができた。これは私が実力のある結果ではなく、神仏の加護や先祖の導きや、師範時代漢文を教えて頂いた崎浜秀主先生のおかげや、その他世話になったもろもろの人の賜物や、偶然な幸運があったためであったろうと、感謝の念に満ちあふれた。

試験の時、今でも忘れることのできない話がある。それは私の合格を予言してくれた人があることである。いま琉球大学の教授になっている山田有功さんだ。山田さんも私と一緒に漢文を受けたが、私の受験番号の四一八番を見て、

「あッ、これは合格だ、ヨイハという番号だ」

といった。四苦八苦の思いをしている時、その言葉は私に絶大の勇気を与え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。果せるかなその言葉通り合格したので、私はいまでもその番号と山田さんの予言を忘れることができない。何だか山田さんの予言は神様のお告げのように思われた。この山田さんは大変な切れ者で、人が一つの免状を取りかねて悩んでいるのを尻目に見ながら、一人で国語、漢文、倫理、教育など幾つも取っているという話であった。囲碁も四段か五段の腕前だというし、頭の構造が普通人とは違っているかも知れない。その上山田さんは面白い人で、逸話が沢山あるが、紙面の都合でそれは他の機会に譲ることにする。

二高女の先生になって十年目の昭和六年の初め頃、成城学園の女学校にいる友人から、

「国漢の先生一人ほしいが、東京に出る考えはないか」

といって来た。考えがないどころか大ありだけれど、出る機会がなくて半ばあきらめているところであったから、この手紙が来た時は、天来の福音を聞く感があった。第一子供達の教育のためにも、上京すればどれほど助かるかわからない。多年の夢が実現するわけである。

しかし長い間世話になった島袋全発校長に何といって切り出すべきか、また愛すべき生徒達といかにして別かれるべきか、わが心乱れざるを得ないものがあった。

東京には早く行きたいが、しかし故郷も去り難い。身は一つにして、心は二つに別かれ、飛び立つ思いと、名残りを惜しむ情、それは組踊銘苅子の天女が子供達と別かれて天へ昇ろうとする時の心持にも似ており、また「二山和睦」の主人公与座大主の心境にも似ておるものがあった。与座大主は北山にいてくれという北山の子供と、南山に帰ってくれという南山の子供と、両方の子供に袖を取られて、どれも捨て去ることができないで、

「二つないぬ我身の中にはさまれて、心くらやみになるが心気」

といってなげき悲しむのであるが、私の心もそれに似ていた。しかしいつまでも悩んでばかりいるわけにもいかないので、ある日の放課後、校長室に島袋校長と緊張した会見をすることになった。

昔金武の山下校長に「君のような優良教員に去られると後が困る」といって、数年引きとめられたことが思い出され、今度は島袋校長が何というであろうかと、胸をとどろかせた。

それはちょうど恋しい人に恋を打ちあけて、エースといわれるか、ノーといわれるか、その返事の一言によって、こちらの運命が決せられるようなもので、言い出すのも大変なことであれば、先方の返事を聞くのも大変なことであった。

島袋校長は初め何かちょっとした用であろうと思ったらしく、私にも敷島のたばこをすすめ、自分もうまそうにふかしていた。

しかし私の話を聞くと、急にたばこをやめて、私の顔を見つめた。

「君は二高女を捨てて、東京へ行くというのか」

という風にも見えれば、また、

「君は何という恩知らずだ」

という風にも見えた。まさかそんなことをいう人ではないが、そんな風に思われはしないかと、私は大いにあわてて、いろいろ事情を述べ、子供たちの教育のため行きたいこと、この機会を外すともう二度と行く時はなかろうと思うことなど、あれやこれや一生懸命に訴えて懇願した。

すると校長は立腹するかと思いの外、別段ふきげんのようすもなく、かえって珍しい話を聞いたという風な顔になって、最初に私にいった言葉は、

「それは、おめでとう」

という言葉であった。私は恋人にエースといわれたような心地がして、胸を撫でおろした。

「いいことだ。実は去年男子師範学校からも君をほしいといって来たが、その時はことわった。しかし今度は成城学園に行くとあれば、とめることはできない。君のためにも子供達のためにも、非常に喜ばしいことだ。心からお祝いするよ」

校長は本当に喜んで祝福してくれた。しかし私が去るということがわかると、後任運動がうるさいから、暫く黙っていてくれというので、私は誰にもいわず心の中で、ひそかに皆に別れを告げ、そうしてひそかに上京の準備をすすめた。

ところが卒業式が三月十四日にすむと、校長は私が学校をやめて東京に行くことを職員全部に知らしたので、皆は驚くやら喜ぶやらなげくやら、とにかく何もしないで別れることはできないと、早速その夜花咲亭で送別会が開かれた。それが沖縄における最後の遊びだと思って、その夜は二次会三次会と方方を遊び回ったが、まるで夢を見ているような心地であった。そしてあの花やかな辻もそれき

りで、再び見ることはできなくなった。

七

昭和六年三月二十一日、大義丸に乗って那覇港を出帆することになった。

桟橋には、島袋校長を始め二高女の職員生徒、卒業生、知人友人、親類大勢が見送りに来てくれたが、ああその時手を振って別かれた人の中には、いまはもう永遠に会えなくなった人が沢山ある。

その日名残りを惜しんだ那覇の町も、すっかり焼きはらわれてしまい、はるか東方に高くそびえていた首里城の光景も、あれが最後の見納めになろうとは、誰が思いがけよう。何もかもまるで夢のような心地がする。

四月一日から、成城学園における新しい生活が始まった。見るもの聞くもの、すべて珍しく、眼を白黒させるばかりであったが、中でも私が最も驚いたことは、ここの生徒は友達を呼ぶのに、まともな名前で呼ぶのは一人もなく、皆互にあだ名で呼び合っていることであった。そのあだ名がまた珍妙不思議な凄いもので、ニヤゴ、ポカ、チュウ、インチョー、ノン、ミチベー、ノラ、テコなどといったあんばいで、美しい女学生の姿を見なかったら、どこかの化け物屋敷に迷い込んだのではないかと思われるほどであった。

沖縄の守礼の邦の乙女達は、朝登校の途中で会うと「先生お早うございます」といって、しとやかに小腰をかがめたものであるが、成城ガールは、百米ぐらい遠くから「お早う」とさけんで、小腰なんか曲げないで、片方の手を高くあげるのである。

これがアホーらしくて、初めの間は応待にとまどったが、しばらくするとこちらもそれに馴れて、片方の手を頭の上に高くあげるようになった。

しかし沖縄の女学生が礼儀正しいのに、東京の女学生が一向礼儀正しくないことにはしばしばあきれ返ることがあった。

沖縄の女学生は、先生に何か用のある時まず教員室の入口でお辞儀をして、それからおもむろに先生の傍に来てもう一度丁寧に頭を下げて、始めて用向きをいうのであったが、成城の女学生は、競馬場の馬のようにいきなり教員室に飛び込んで来て「先生ペンかして」とか何とかいって、返事も待たないで、すぐペンをひきつかんで駆け出して行くありさまであった。

あっけにとられて、私がその後姿を見送っていると、イブル先生(英語の先生)が「どうです驚きましたか」と、面白そうに笑っていた。ああ懐しいイブル先生、この先生は新参の私に大変親切にしてくれたが、惜しくも故人になってしまった。デンブ先生と共に忘れ得ぬ人である。

私が成城で教えた生徒の中にも、不幸にして卒業後亡くなったものが数名いるが、その中で長岡聖子といって、よく出来る方で東京女子大学まで進みながら、中途で病に倒れて空しくなった可哀想な生徒がいた。

その生徒を追悼するため、同級生達が思い出の記の原稿を持ち寄り、また亡き人の日記や感想録を集めて一冊の本とし出したところ、はからずもその亡き人の日記の中に、

「久し振りで女学校へ行って、島袋先生とお話して嬉しかった。大きい慈愛を胸一杯にひろげていたわって下さる先生。聖子の尊敬する第一の先生である」

という一節があった。生きている時は、そんなことを一言もいったことはないし、そぶりにさえ見せたことはなかった。死んで後も日記が発見されなかったら、永遠にそのことはわからないで過ぎ去ってしまうことであった。女の子の胸の底に思っていることが、いかに深いものであるかということがわかった。

成城学園には約二十年いたが、その間何一つ学校から表彰状をもらったことはなかったが、この長岡聖子の日記の言葉は、私にとっていかなる表彰状にもまさるもっとも感激深いものであった。

八

終戦後体を悪くして、医者が教師稼業をやめて、雑誌の編集のような仕事をしたらどうかとの話があったので、新聞雑誌の評論をする雑誌の編集手伝をしていたが、それも一年半でつぶれてしまったので、生まれて始めて浪浪の身の上となった。

何の仕事もなく、ぶらぶら遊んでいるのは、一見気楽のようであるが、これほど手持不沙汰で物足らぬさびしいものはない。そこで沖縄語辞典の著述に汗水を流したり、琉歌の研究に指を染めたりした。

その頃火野葦平氏が、毎日新聞に「赤道祭」という小説を書くことになったが、その小説の中に琉歌を入れたいから、誰か適当の人を推薦してくれと、比嘉

春潮さんに頼んで来た。比嘉さんは早速私に作ってくれと、火野氏の手紙を回して見せられたが、それによると、赤道祭の女主人公は沖縄の女で、思鶴というものだが、それが男主人公第四郎という男を見て、琉歌をよむことになっているから、適当によんでくれということであった。

そこで私は、その注文によって十首内外よんでやったが、それは比嘉春潮さんが序文の中でご紹介下さったので、ここには省略する。

それからもう一つ思い出されるは、一九五八年の正月号の琉球新報に、「琉歌のある風景」というグラビア版の附録を出すことになっているが、首里城の漏刻門と、那覇市の古着市場の写真にあてはまる適当な琉歌はないかと、東京からわざわざ稲国記者が飛んで来た。

しかしどの歌集を探しても、それに相当する歌はない。そこで私が代ってよんでやろうかというと、是非どうぞというので、漏刻門の荒れ果てた光景に対しては、

「按司べ親方べ親雲上た揃て通ひたる御門や名残りばかり」

と詠み、古着市場の光景に対しては、

「飛白(ちもり)のきよらさ縞模様のきよらさ昔覚(ぼ)べ出しゆさ無蔵が姿」

と詠んでやった。その他にも二高女の卒業生が琉歌をよんで送って来た場合には、それに返歌をよんでやったこともあるが、あまり長くなるのでこれ位にしておきたい。

終りに本書を世に送り出すに当って、資料を提供されたり、題字や序文をかいて下さったり、いろいろお世話下さった比嘉春潮氏及び各方面の支持者の方々に深くお礼申し上げる。

先年病気に倒れた時、成城女学校同窓会の爽美会から手厚きお見舞いと励ましを頂いたが、今度また本書刊行に当っては沖縄二高女の白梅同窓会の皆さんから、物心両方面のご後援を頂いた。記して厚く感謝の意をのべる。

昔の教え子たちから、いろいろ親切にされることは、この上なくありがたいことである。京都の国文学者新村出先生は、女優の高峰秀子がごひいきのそうであるが、私のごひいきはそんな赤の他人ではなく、沖縄の二高女の卒業生にも成城学園女学校の卒業生にも、たくさんのやさしいなつかしい人たちがいるのは、非常に嬉しいことである。

更に特記したいのは、琉球文化の保存と普及のため絶えず尽力されている沖縄タイムス社が、このたび多大の犠牲をはらって本書を出版されたご好意に対し、高嶺朝光氏、座安盛徳氏、豊平良顕氏及び幹部各位並に記者諸君や従業員諸君の労苦に深く敬意と謝意を表するものである。

昭和三十九年（一九六四）二月

島袋盛敏

目次

序文（比嘉春潮）
序にかえて　私の歩んだ道を語る（島袋盛敏）

節組の部

一　かぎやで風節（三十首）……1
二　恩納節（二十五首）……10
三　中城はんた前節（十五首）……20
四　久米島はんた前節（一首）……24
五　石川はんた前節（三首）……25
六　特牛節（十四首）……25
七　長伊平屋節（十一首）……29
八　謝敷節（十七首）……32
九　しゆんだう節（一首）……37
一〇　それかん節（三首）……37
一一　やれこのし節（三首）……38
一二　辺野喜節（六首）……39
一三　金武節（二十五首）……40
一四　長金武節（一首）……47
一五　作田節（十二首）……48
一六　揚作田節（十一首）……51
一七　中作田節（七首）……53
一八　早作田節（三十首）……55
一九　伊集早作田節（八首）……60
二〇　白瀬走川節（十一首）……63
二一　久仁屋節（十八首）……65
二二　伊集の木節（一首）……69
二三　大兼久節（九首）……70
二四　仲村渠節（五十五首）……72
二五　赤さこはでさ節（三首）……85
二六　踊こはでさ節（三首）……86
二七　屋慶名こはでさ節（一首）……87
二八　宮城こはでさ節（九首）……88
二九　仲順節（十四首）……90
三〇　仲間節（六十四首）……93
三一　ちるれん節（七首）……108
三二　坂本節（十首）……106
三三　伊江節（四首）……112
三四　あがさ節（六首）……113
三五　瓦屋節（十五首）……114
三六　芋の葉節（五首）……118
三七　ひやいひやい節（一首）……119
三八　真福地のはいちやう節（二首）……119
三九　やくにや節（四首）……120
四〇　早嘉手久節（一首）……121
四一　昔嘉手久節（一首）……121
四二　御縁節（一首）……122
四三　つなぎ節（一首）……122
四四　七尺節（十六首）……122

四五 揚七尺節（二首）……126
四六 本田名節（二首）……127
四七 昔田名節（一首）……127
四八 大田名節（八首）……127
四九 ちゃんな節（九首）……129
五〇 長ちゃんな節（一首）……131
五一 首里節（十一首）……132
五二 諸鈍節（六首）……135
五三 遊諸鈍節（一首）……136
五四 暁節（十首）……136
五五 茶屋節（一首）……139
五六 仲節（一首）……139
五七 十七八節（三首）……139
五八 東こま節（七首）……140
五九 天川節（七首）……142
六〇 島尻天川節（一首）……144
六一 早天川節（三首）……144
六二 本花風（三首）……145
六三 花風（十三首）……146
六四 稲真積節（六首）……149
六五 本伊平屋節（一首）……150
六六 通水節（九首）……150
六七 比屋定節（三首）……153
六八 東江節（二十三首）……154
六九 伊野波節（三首）……159
七〇 子持節（十二首）……161
七一 散山節（四十二首）……164
七二 述懐節（四十九首）……172
七三 よしやいなう節（九首）……181
七四 立雲節（十四首）……182
七五 百名節（六首）……185
七六 屋慶名節（六首）……187
七七 伊豆味節（一首）……188
七八 さあさあ節（三首）……188
七九 与那原節（五首）……188
八〇 垣花節（四首）……190
八一 沈仁屋久節（五首）……191
八二 揚沈仁屋久節（一首）……192
八三 高禰久節（三首）……192
八四 すき節（六首）……192
八五 池当節（十一首）……194
八六 与那節（七首）……196
八七 津堅節（四首）……197
八八 汪佐節（一首）……198
八九 湊くり節（一首）……199
九〇 宇地泊節（五首）……199
九一 綾蝶節（三首）……200
九二 高離節（七首）……201
九三 ずず節（六首）……202
九四 しほらい節（七首）……203

九五　世栄節（四首）……205
九六　松本節（三首）……205
九七　亀甲節（一首）……206
九八　かんきやい節（二首）……206
九九　仲里節（六首）……207
一〇〇　石の屏風節（五首）……208
一〇一　なげやだけ節（一首）……209
一〇二　勝連節（二首）……209
一〇三　じつさう節（一首）……210
一〇四　南嶽節（四首）……210
一〇五　遊しやうんがない節（二首）……211
一〇六　稲摺節（一首）……212
一〇七　弥勒節（三首）……212
一〇八　安波節（六首）……213
一〇九　仲泊節（二首）……214
一一〇　のんやる節（一首）……215
一一一　高橋節（三首）……215
一一二　今帰仁の城節（二首）……216
一一三　よらてく節（二首）……217
一一四　久米阿嘉節（二首）……217
一一五　久米の小浜節（一首）……218
一一六　砂持節（三首）……218
一一七　浜千鳥節（四首）……218
一一八　あさだうや節（一首）……219
一一九　大浦越路節（一首）……220
一二〇　満恋節（五首）……220
一二一　川平節（一首）……221
一二二　さつく節（二首）……221
一二三　八月節（四首）……222
一二四　大浦節（五首）……223
一二五　本大浦節（二首）……224
一二六　柳節（七首）……225
一二七　やえるさ節（一首）……226
一二八　仲風（百二十三首）……226
一二九　平敷節（九首）……247
一三〇　出砂節（十首）……249
一三一　漢那節（六首）……251
一三二　白鳥節（五首）……253
一三三　小浜節（十首）……254
一三四　本部長節（六首）……256
一三五　蝶小節（三首）……257
一三六　天仁屋節（三首）……258
一三七　千瀬節（五十首）……259
一三八　とくしやんま節（一首）……268
一三九　打豆節（六首）……268
一四〇　昔蝶節（二首）……270
一四一　本散山節（十三首）……270
一四二　桑もり節（一首）……273
一四三　高いちゆび節（二首）……273
一四四　作たる米節（二首）……274

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com